

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ: ニュース・レターNo.54(2018年6月号)◆

梅雨も明け、すでに暑い日々が続きますが、みなさま、いかがお過ごしでしょうか。『Intelligence』購読会員の皆様は、機関誌『Intelligence』第18号、そして会員向けブログ、ニュース・レターなどをご愛読いただきありがとうございます。さて、次号『Intelligence』第19号の投稿原稿を募集しております。締め切りは、9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。現在第25回の王楽さんのエッセイまでネットでご覧頂けるようになっていきます。いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第119回研究会】(6月9日(土)午後2時30分～5時30分)

* 谷川舜(早稲田大学大学院政治学研究科)「植民地台湾における戦時下の新聞と宣伝」

本発表は、帝国日本における植民地台湾のジャーナリズム史に関して、特に戦時下から戦後の接收を受けるまでの言論活動を、1932年以降の言論開放政策による「三大紙体制の動揺」、戦時体制下における週刊誌の廃刊による「第一次新聞整理」、決戦体制下における日刊紙の統合による「第二次新聞整理」に、時代区分し報告した。特に、1944年に成立した『台湾新報』が日本の『毎日新聞』と台湾の『興南新聞』の連携でできたこと、台湾軍と総督府の両者による報道・宣伝活動のあり方は、先行研究でも深められていない点でもあるので今後の検証が重要であることが指摘された。

* 村山龍(法政大学文学部助教)「1930年代における文化統制の諸相: 検閲官・佐伯郁郎の役割をめぐって」

本発表は、戦前から戦中にかけて内務省警保局に勤務した検閲官・佐伯郁郎に焦点を当て、1930年代半ばに内部から文化統制に関わった佐伯の思想を照射するものであった。自らも詩をもとの文学青年の出自を持つ佐伯の検閲は、一義的な「禁止」ではなく、理想とされた表現への善導という側面もあるとされ、その具体的な事例として戦時下の児童読物改善運動への参加が指摘された。

* 吉田則昭(目白大学メディア学部)「米国資料からみたナウカ社と大竹博吉: 戦後ソビエト文化流入の一断面」

本発表は、戦前から戦後にかけて、ソビエト専門の図書出版として知られたナウカ社創設者の大竹博吉と、同社の総合雑誌『社会評論』に注目することで、戦後日本社会における外国文化の流入形態を考察するものであった。占領期に活発化するソビエト文化は、雑誌・映画・歌・組合文化といったマイナー・メディアによって普及され、その一環を同社が担っていたことが指摘された。また米国公文書館の大竹とナウカ社に関する調査資料も併せて紹介された。

【コラム: 1968年から50年 昔といま】

今年が明治維新150年の年であるが、同時に1968年から50年目の年でもある。この時代の意味は何だったのかと大仰にかまえるつもりもないが、ちょうどそうした「1968年」を舞台とした庄司薫原作の映画『赤頭巾ちゃん気をつけて』(1970年、東宝)がリバイバル上映されていたので観てきた。上映していた映画館の連続企画のキャッチコピーは、「70年代の憂鬱 — 退廃と情熱の映画史 —」である。1ヶ月間、作品17本を連続上映するという企画でその第一回目上映が本作品であった。

当時、東京郊外の幼稚園にいた私にとっても「1968年」は同時代として体験しながらも、まだ物心が付

くか付かない頃である。幼稚園で「アンボ反対」などと、当時の若者らのデモの真似をしたこともない。しかし、当時の人びとが何を考え、どんな欲望の中で生きていたのか、そして各人の日常を映画の中の表象を通して垣間見ることができるのは、素人の私にとっても懐かしさ混じりで楽しいことでもあった。知っている場所なども沢山出てくる。

映画自体は、大学紛争で入試が中止となり、途方に暮れる受験生・薫クンがあてもなく東京の街を彷徨う話である。主人公・薫君の兄に「東大法学部では、世の中がどうしたらみんな幸福になれるかを勉強しているんだ」と語らせるセリフがある。同じ映画を観た本誌編集委員の鈴木貴宇先生曰く、消え行く進学校(日比谷高校)に、近代日本の「知的なるもの」(＝教養主義)を重ねた団塊世代にとって、『君たちはどう生きるか』的な岩波教養主義を伝えるものだったのではないかと感想を述べておられた。一方、私にとっては、ピンキーとキラーズが『恋の季節』を熱唱しているのを聴いて、「政治の季節」からの時代の変わり目を想ったり、デートしているレストランの窓から視界に入ってくる屋外広告を見て、薫クンらが広告主企業の社名・商品名を連呼していたのが(ちなみに、これは映画のみの演出)、思想よりもモノへの気配を感じさせ感慨深かった。穿ち過ぎの面もあるかもしれないが、映像も一つの時代を伝える証言である。原作もスノビズム沢山で鼻持ちならない面もあるのだが、ともかく50年前の「昭和の記憶」は、日に日に遠くなりつつある。

さて、私事ながら4月から大学に職場を変え、まだ一年生しかいない新学部で、目下、社会学の授業を担当している。「日常」とか「現実」という概念を、社会学からみるとどのように分析できるのか、具体例を挙げながら試行錯誤している。映画にみたような、時代の表象をつかまえることも重なる面もある。はたして学生らにはどれだけうまく伝わっているか、いつも疑問ではあるが、過去と現在が混在する同時代史を語ることの愉しさと難しさを感じている。

[7月7日付 文責:吉田則昭]